

かね  
金

こ  
子

ひらく  
拓

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第43号
学位授与年月日	平成9年2月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 国史学専攻
学位論文題目	日本中世における政治秩序の形成と構造
論文審査委員	(主査) 教授 羽下 徳彦      教授 今 泉 隆 雄 教授 玉 懸 博 之 助教授 大 藤      修

## 論文内容の要旨

### 本論の課題

本論は、日本中世(十一～十六世紀)の社会において、人間集団の秩序を形成する契機はいかなるものに求められ、それらが人間の社会関係の形成にいかなる機能を果たしていたのか、を考察するものである。

考察の具体的なねらいとして、第一に、日本中世の社会を担った武士たちが、古代以来の支配階層の身分秩序体系である律令的官位制にいかに位置づけられ、彼らの集合体である武家政権は、かかる所与の秩序体系である官位制にいかなる対応をとったのか、武士たちは官位をいかなるものと認識していたのか、などの問題を検討することにより、官位制的秩序体系の中世社会における有効性を見極めることにある【第Ⅰ部】。

第二に、人間(支配階層・被支配階層を問わず)が他者とさまざまな関係を取り結ぶさいの普遍的契機と思われる「贈与交換」を、日本中世社会の実態にそくして検討を加え、それらの行為によって形成される人間関係と、その人間関係の積み重なりによって形成される政治秩序(「礼の秩序」)の歴史的特質を明らかにする【第Ⅱ部】。

要するに、前者は「官位制的秩序」、後者は「礼の秩序」を俎上に載せ、それぞれの「秩序」が中世の人びとの関係をいかに規定していたのか、主として武家に焦点をあてて考察するのが本論の

目的である。以下、本論の構成を呈示し、それにそって論旨を要約してゆく。

## 序章 本論の課題と構成

### 第Ⅰ部 中世武家政権と律令的官位制

第一章 鎌倉幕府・御家人と官途／第二章 初期室町幕府・御家人と官途／補論 南北朝期の成功制に関する覚書／第三章 中期室町幕府・御家人と官途

### 第Ⅱ部 中世後期における「礼の秩序」の形成と機能

第四章 室町時代における贈与に関する一考察——進物折紙と室町幕府財政——／第五章 室町殿南都下向における負担—贈与の構造と「御礼」／第六章 室町殿権力と「御成」「御礼」／第七章 中世後期の守護権力と「礼」——東寺領丹波国大山荘・播磨国矢野荘を中心に——

### 終章 まとめと課題

## 第Ⅰ部 中世武家政権と律令的官位制

ここでいう「律令的官位制」とは、701年に中国の律令制度を継受して日本に導入された大宝律令（および養老律令）に定められ、中央貴族官人・地方豪族を身分制的に秩序立たせる官職と位階の階層構造の、中世的変容形態のことである。

この律令的官位制の頂点は本来天皇が位置するものであったけれども、すでに十一～十二世紀、政治的権力の所在が摂関家（藤原氏）や院（上皇）に移ったとき、実質的な官位の任免権は彼らに掌握されていたといえてよい。摂関家や院は、自らの近臣を高官位につけることで、彼らとの間の人的紐帯を強め、権力を確固たるものとしていったのである。つまり律令的官位制は、時々政治権力による権力基盤形成のための人的編成の梃子となっていたといえよう。かかる状況から、官位任免における形式＝天皇、実質＝摂関・院といった二元論的思考が生じる。

政治的権力の所在が、武家政権の確立とともに鎌倉幕府に移ったのちも、この構造は基本的に変わらない。従来は右のごとき思考の制約から、鎌倉・室町幕府といった武家政権の内部における律令的官位制を“桎梏”のごときマイナスの意味で把握する傾向があった。また、武家政権内部の階層構造を分析する格好の素材として、御家人などの帯びた官職やその昇進ルートを精緻に洗い出す研究が主流であった。

第Ⅰ部では、こうした静態観察の方法をとらず、政治的権力の所在が武家政権に移行した鎌倉時代以後、鎌倉・室町の両幕府が律令的官位制をいかに受容し、その政治過程のなかで律令的官位制や武士の官位に対する観念はいかなる変化を遂げたのか、といった動態的検討を試みる。

### 第一章 鎌倉幕府・御家人と官途

本章では、貞永元年（1232）に鎌倉幕府の基本的法典として制定された御成敗式目のなかでも、御家人の官位推挙に関する規定である第三十九条を検討し、鎌倉幕府は、律令的官位制を積極的に受容しようとしていたことを明らかにした。ここで幕府は、基本的に、御家人の推挙を「成功」という、寺社修造や朝廷儀式費用に充てるための物銭の供出による見返りとして官位を与えられる制度のみによって御家人の官位を推挙し、御家人の身分統制を図ろうとしていた。

この背景には、後鳥羽上皇が倒幕の兵を挙げて失敗した承久の乱（承久元年＝1221）の結果、鎌

倉幕府の覇権が確立したことによる、御家人に対する恣意的な官位推挙の増加が、源頼朝以来築き上げられてきた御家人の官位制的秩序を揺るがす危機をもたらした、といった状況があった。御家人の序列を官位制的秩序によって表現し、整然と維持してゆくためには、所与の律令的官位制の運用システム（具体的には成功制）を積極的に受容し、その運用システムの内部で幕府が監視をするのが、もっとも手っ取り早い方法であったのである。

この結果として、武家政権を構成する武士たち個々人は、一定の法則にしたがって何らかの官位を帯びることになり、自分や自分の属する家のアイデンティティとして、さらに他者との序列の上下を測る準拠枠として、官位や律令的官位制を認識するようになる。そのいっぽうで、官位を推挙されるために成功を行ない、朝廷に対する経済的貢献をなすことにより、その見返りとしての官位は“朝廷への奉仕”であるとする観念は存続した。

## 第二章 初期室町幕府・御家人と官途

本章では、第一章で明らかにした鎌倉幕府の官位推挙システムや、武士の官位に対する観念が、十四世紀前半の南北朝内乱を経て、いかなる変容を遂げるのかを検討した。

南北朝内乱の過程で、初期室町幕府のなかで官位推挙を行なう主体は、足利尊氏・義詮（尊氏子）・直義（尊氏弟）の三者に分裂していたことが、三者が発給していた官途挙状（御家人の官位を推挙する文書）によって明らかになる。なかんづく、鎌倉幕府の基本的な官位推挙システムであった成功制をもとに官位を推挙していたのが足利直義である。すなわち、鎌倉幕府の御家人官位推挙システムは、直義が継承していたということになる。ところが、観応の擾乱という尊氏・直義兄弟の内訌によって直義が没落した結果、鎌倉幕府以来続いた、御家人の成功制による官位推挙のシステムは消滅し、同時に成功制自体もほぼ消滅するに至った。

“朝廷への奉仕”といった意味合いを付与されていた成功制が消滅したことによって、幕府將軍による御家人の官位推挙は、制度上將軍の恣意で行なわれることになった。かくして官位は、それを受ける立場からは、背後に朝廷（＝＜公＞）を意識しない、純然たる將軍からの恩賞として、將軍－御家人間を直接的に結びつける契機となったのである。

### 補論 南北朝期の成功制に関する覚書

ここでは、第二章において、成功制が足利直義の官位推挙と相互規定的関係にあり、直義没落以後それがほぼ消滅したことを論証する根拠となった、『園太暦』（洞院公賢の日記）収載の除目聞書（任官者の一覧）の尻付（任官理由）から、任官理由が成功によるものであった人物を抜き出し、それらの人名比定を行なった。結果、そのおおよそが幕府（＝直義）の推挙によって任官したことを推断した。

## 第三章 中期室町幕府・御家人と官途

本章では、第二章で述べた官位観念の変容が、さらに室町幕府中期（十五～十六世紀）にいかに進展したのかを検討した。

当該期、官位は以前にもまして將軍の恣意で授与されるようになり、加えて受ける立場の御家人から任意で選択されるようにもなる。制度的には、室町殿が天皇発給の任官辞令である口宣案の袖

(右端中央)に花押を据える“室町殿袖判口宣案”の出現、出家入道者の任官、定員無視の任官(員外化)、新たな官職名の創出などの法的逸脱現象が次々とこの時期に見られるようになった。

これらの事実から、室町幕府は、律令的官位制とは枠組みこそ同じであっても、内容はまったく別の武家官位体系を創りだしたと評価できる。こうした武家官位体系は、その本源的授与者である天皇(=朝廷)とは全く無縁に、ひとり歩きするに至る。もっとも、その授受の恣意性ゆえ、武家官位の御家人集団内部の身分秩序を体系的に整序する機能は、鎌倉幕府に比べて相対的に低下したと思われる。

室町幕府において確立された「主従関係構築の媒介物としての官位」は、その後の戦国大名や織豊政権において、これまで以上にクローズアップされ、とりわけ豊臣政権下に編成された“武家官位制”は、従来の律令的官位制を換骨奪胎した、政権内部における諸大名間の身分秩序統制システムのひとつとして特筆し得るものである。また江戸幕府も類似のシステムを運用するなど、律令的官位制(とその変容態)は、中世・近世の武家政権の身分秩序構造を一貫して見通せる格好の素材なのである。

## 第Ⅱ部 中世後期における「礼の秩序」の形成と機能

成功制の消滅後も、将軍による官位授与の見返りとして、御家人は将軍に対して「御礼」とよばれる銭・太刀などを納付した。従来は、この「御礼」をたんに成功の系譜を引くものと見たり、現代的意味での文字どおりの「お礼」として理解してきた。ところが同時代の、官位授与とは別の局面の史料を読むと、「礼」とは現代の「お礼」としてばかりでなく、正月・八朔(8月1日)に取り交わされる贈与交換儀礼)・歳暮などの年中行事の機会、さらには為政者周辺に起こった慶事のと き、「礼」と称した贈与交換が頻々と取り交わされていたことに否応なく気づかされるのである。

「礼」とは、「儒教が理想とする社会秩序」といった漠然たる観念として理解されるのが常であるが、日本中世においては、「礼」を具体的に「社会秩序」たらしめる行為として、贈与交換が重要であったことを、右の事実からうかがうことができる。室町時代においては、第Ⅰ部で検討した「官位制的秩序」よりもむしろ、こうした「礼」と呼ばれた贈与交換によって形成される秩序(「礼の秩序」)が相対的に重視され、権力も積極的にその構築を意図していたとおぼしい。

第Ⅱ部では、以上の問題意識にたって、贈与交換行為が日本中世後期において「礼」の語と結びついた歴史的意義を考察し、その積み重なりによって構築される「礼の秩序」の様態を明らかにしたい。

### 第四章 室町時代における贈与に関する一考察——進物折紙と室町幕府財政——

本章では、室町幕府の支配階層の間で、贈与交換がいかに活発に行なわれていたか、ということ を、「進物折紙」という文書を軸に検討した。

「進物折紙」とは、贈与行為のさいに贈与者から受贈者に進上する金品が記される目録のことであるが、室町時代に登場したこの文書は、次第に現物授受と乖離してゆき、結果的に将来の現物贈与を約した約束手形的性格を帯びるに至る。極端に言えば、進物折紙の授受のみ(現物の授受なし)で贈与が完結する場合もあった。さらにそれが進展して、金銭の支払・給付も進物折紙によってなされるようになり、これは一般的な貨幣の機能の変化を念頭におけば、非常に興味深い事例になる

と思われる。

右の事実は、現物納入後の贈与者への進物折紙の返却（ときには進物折紙に納入を確認したことを示す合点や署判が記されることもあった）、贈られた進物折紙を第三者に移譲して、現物授受は当初の贈与者とその第三者でなされる（いわば債権譲渡）といった現象から裏付けられる。

当該期の最高権力である室町幕府は、幕府一将軍に贈られた進物折紙の未納分を催促する「折紙方」という部局を設置して、進物折紙による贈与を自らの財政基盤の一つとしてシステムティックに吸収していた。以上のように、中世後期における権力にとって、贈与交換はその存立に必須の契機であったと思われるのである。

## 第五章 室町殿南都下向における負担——贈与の構造と「御礼」——

本章では、まず第一に、室町殿の南都（奈良）下向という行事に関連して、迎える側である南都興福寺がいかなる方法・論理でその費用を調達しえたのか、調達された物銭によっていかなる贈与・饗応が繰り広げられたのかを検討した。第二に、室町殿が南都から帰洛したのち、南都の僧侶が上洛し、加えて周囲の公家・武家の各人が室町殿に参集して道中の無事を言祝ぎ太刀・進物折紙などを贈与する「無為之御礼」という行為の歴史的形成過程を検討した。

室町殿の南都下向は、三代義満を皮切りに、八代義政まで見られる、いわば室町幕府の政治的安定期に催された行事であった。とりわけ六代義教・八代義政に至ると、“一代一度の盛儀”の色彩を帯びるようになる。

興福寺は室町殿南都下向にあたって、自らの守護管国であった大和国に一国平均段銭を賦課して用途を調達するいっぽうで、興福寺の二大門跡である一乗院・大乘院両門跡もまた、自らの所領に南都下向を名目とする段銭を賦課している。また興福寺が調達した段銭のなかから、一定額が両門跡に給付されていた。当時大和国における一国平均段銭は、二十年に一度の春日社造替のためのものが本義であったので、南都下向にあたって賦課された段銭は、室町殿権威を正当化の根拠として、興福寺・両門跡が協調して一国平均段銭を拡大、大和国の人々から収奪を行なったもの、と評価できる。

こうして得た費用によって、興福寺・両門跡から室町殿に対して莫大な財貨が贈与されたのであるが、室町殿はそれらをほぼ全て興福寺に寄進している。贈与された財貨をそのまま寄進するという行為は、室町殿の日吉社参詣のおりにも見られるものであり、室町殿は、贈与された財貨を神仏へ寄進することによって自らの権威を誇示したといえるのである。

室町殿の帰洛後に催される「無為之御礼」は、神仏という宗教的権威を媒介することなく、贈与交換によって室町殿権威を誇示する契機であった。いっぽうで「御礼」を行なう側も、室町殿権威を正当化の根拠として、その費用の調達を行なっていたことは、右にあげた興福寺の場合のほかにも、室町殿の代替りなどにさいしてなされる「継目安堵」の「御礼」調達のおりの東寺や、安芸の国人領主小早川氏などの事例からうかがうことができる。

以上の考察から、室町殿は、「礼」と称される贈与交換行為の集積によって、自らを政治秩序の頂点に位置づけていたことが明らかになった。

## 第六章 室町殿権力と「御成」「御礼」

本章では、第五章で取りあげた南都下向のごとき特定行事にとどまらない、「御成」と呼ばれた室町殿の公家邸・武家邸・寺社への参向と、南都下向の「無為之御礼」ととどまらない諸人の室町殿への参集といったいわば双方向の儀礼の歴史的形成過程を考察する。

六代將軍義教は、永享11年に大々的に東寺へ御成を挙行している。このとき東寺がいかなる方法で用途を調達したのか、第五章での分析にならって若干の検討を行なったところ、興福寺と同様自領に段銭を賦課して費用に充てていたことが明らかになった。

この永享11年とは、「永享の乱」と呼ばれる、鎌倉公方足利持氏の反乱がひとまずの終息を迎えた年である。義教は「関東静謐」を理由として、側近の正親町三条実雅邸を皮切りに、関白などの公家邸、管領などの武家邸、五山禅院などの寺社へ御成を挙行した。永享の乱のごとき“国家的危機”の終息時に、恒例の御成に重ねて、室町殿の御成を要請するということは、国家的秩序を維持する役割を室町殿が果たしていたことを端的に表現するものである。

慶事のさいに公家・武家・寺院門跡が「御礼」と称して室町殿に参賀し、進物を贈る儀礼は、たとえば年中行事的な正月参賀の場合、四代足利義持の応永17年（1410）、正月8日に護持僧・同10日に摂関家・公家・門跡などと定められたことを明らかにした。これは、義持の父義満の死去、義持の將軍職継承と密接に関わるであろうことが推測される。

また、年中行事的な「御礼」以外の臨機の「御礼」の場合、検討の結果、義持の晩年、応永30年頃から次の義教の時期にかけて徐々に固定化が進み、義教期に至ってそれらも当たり前のごとく催されるに至ることがわかった。こうした変化の背景として、將軍権威の低下を防ぐため、贈与交換儀礼によって身分秩序を確認し、権威を莊嚴化するといった意図があるものと思われる。

以上のように、室町殿を頂点とした支配階層社会において、「礼」が贈与交換行為と結びつき、それが為政者を頂点とした秩序形成の契機となったのは、応永年間、十五世紀初頭であり、ここに贈与交換行為と「礼」の結合の歴史性を看取できるのである。

## 第七章 中世後期の守護権力と「礼」——東寺領丹波国大山荘・播磨国矢野荘を中心に——

本章では、これまでの支配階層間の贈与に向けてきた目を在地社会に転じ、中世後期における荘園支配のなかで、「礼」がいつ登場し、いかなる機能を果たしていたのかを、東寺領荘園である丹波国大山荘・播磨国矢野荘を例にとって、主として守護権力との関わりにおいて考察する。

大山荘に守護権力が侵出するようになったのは、南北朝内乱のさなか十四世紀中葉であるが、このことは大山荘の年貢算用状（収支報告書）のなかに守護への負担が計上されていることで確認できる。大山荘の場合、「本所半分・地下半分」負担原則によって、百姓たちが負担した守護役など守護の収取物の半分の、年貢収納時に控除分として申告し、年貢から差し引いて決済していた。結果的に、荘園領主東寺も守護役を半分負担していたことになる。

山名氏が丹波国守護であった時期に重なるかたちで、大山荘の年貢算用状に見える特徴的な記載として、守護山名氏への「憑」（タノミ）の贈与がある。「憑」とは八朔の贈与のことであるが、この記載が山名氏の衰退と同時に見られなくなることは、「憑」贈与が守護山名氏の権力的性質と密接に関連していたことをうかがわせる。すなわち、守護山名氏にとって、管国内の荘園に侵出する梃子として、在地の人びとと取り交わす「憑」の贈与があったことになる。

大山荘における「礼」の初見は応永25年(1418)である。これは、第六章で検討した支配階層間で「礼」が贈与交換と結びつく時期とほぼ一致する。この時期守護は細川氏に交替しているが、嘉吉年間(1440年代)頃から、守護の出先機関が置かれていた八上に対して「春礼」という正月の祝儀が毎年のように贈られていることが確認できる。この「礼」は、従来「守護が課する租税」として理解されてきたが、第六章の検討などから、在地と守護との関係を維持するための贈与であると考えたい。

いっぽう播磨国矢野荘でも、在地で百姓が負担した守護役などの賦課を、年貢算用状で控除分として申告し、年貢より控除される構造をとっていた。矢野荘で「礼」があらわれるのは応永3年(1396)であるが、それが恒常的に守護の収取として算用状に記載されるようになるのが応永19年(1412)以後である。内容は、大山荘と同様正月の「礼」や歳末の「礼」など、年中行事的機会に贈られた贈与としてのものである。

当該期播磨国守護は赤松氏であったが、赤松氏の播磨国支配は守護代／国衙眼代という二元的形態をとり、「礼」贈与もその二者に対してなされていた。このことは、「礼」が、それを負担する百姓にとっては、自らの存立に直接関わる支配者に対して、自らの権益の保護を得るための贈与であると認識されていたことに他ならない。在地において守護支配の末端を担い、百姓たちと対峙する守護代等も、自らの権力を成り立たしめるために、正月・歳末などの「礼」を百姓に要請、収取し、在地における「礼の秩序」を形成していたのである。

すなわち、中世後期の権力による収取(収奪)は、「礼」とは無関係では存立できなかったのではなかろうか。年貢・公事を収取するといった荘園制的収取構造が揺らいだこの時期の権力の存立を支えたのが、観念的にも現実(経済)的にも「礼」というものだったといえるのである。

## まとめ

第Ⅰ部においては、鎌倉幕府が律令的官位制をその内部の身分秩序整序のために積極的に取り込んで以来、武家社会のなかで將軍－御家人の主従関係を構築する媒介物として官位が重要視され、かつ自己と他者との序列の上下をはかる準拠枠として官位制が認識されていたことをまず明らかにしたが、南北朝内乱のなかで足利直義が担っていた鎌倉幕府以来の成功による官位推挙が消滅するにともなって、官位は純粹に將軍からの恩賞とみなされるようになり、それが恣意的に授受されることで、総体としての秩序整序の機能を低下させたことを論じた。

第Ⅱ部では、中世後期にその秩序整序の機能を低下させた律令的官位制に取って代わるかのように、贈与交換行為を契機とする、政治的権力者(具体的には室町殿)を頂点とした秩序が重視されるようになり、それら贈与行為が、十五世紀初頭に「礼」と呼ばれる本来的に「儒教が理想とする社会秩序」という観念的イメージしか有していなかった語と結びつくことによって、権力者を頂点とした秩序形成の重要な契機となったことを明らかにした。

さらに「礼の秩序」は、支配階層内部に限らず、守護権力を通じて百姓身分の人びとをも含み込んだ、重層的な秩序体系であり、それは観念の次元にとどまらず、具体的な「礼」(贈与交換)行為によって成り立つものであったのである。中世後期の政治権力は、「礼」を媒介に自らの権威を誇示するとともに、その存立に必要な不可欠な収取として「礼」贈与を措定していたと考えられる。

## 論文審査結果の要旨

本論文は鎌倉・室町幕府における政治秩序の形成と構造を、律令的官位制と贈答儀礼を核として論じた研究であり、その論ずるところは十二世紀から十六世紀に及び、二部七章から構成される(第二章に補論を付する)。

序章「本論文の構成と課題」では、鎌倉・室町幕府と律令的官位制の関係と、贈与交換行為が形成する「礼」の秩序とに関する、従来の研究を整理し、これらが政治秩序の原理となっていることを確認する。

第一部「中世武家政権と律令的官位制」では、鎌倉幕府が律令的官位制＝官途を如何に受容し規制したかを論じ、室町幕府初期の前代踏襲から変質への様相を論ずる。

第一章「鎌倉幕府・御家人と官途」では、幕府は御成敗式目第三九条で御家人の官途推挙の原則を成功任官に限定して規定し、御家人が朝廷から恣意的に官途を受けることを禁じ、幕府を通じて律令的官位制の枠内で御家人間の序列が相互に認識される体制を構築したとする。

第二章「初期室町幕府・御家人と官途」では、南北朝内乱の渦中にある初期幕府では、官途推挙権は足利尊氏・義詮・直義の三者が行使しているが、官途挙状の分析から、成功を基礎とする鎌倉幕府的な官途推挙は直義が行ない、直義の没落以後成功推挙は消滅し、尊氏とその後継者義詮によって、朝廷への成功奉仕とは関わらない、將軍の御恩としての官途推挙が定着したとする。

補論「南北朝期の成功制に関する覚書」は、第二章の考察の基礎となる史料「園太暦」所載「除目聞書」の成功任官者の人名比定を主とする史料考証であり、その結果は的確である。

第三章「中期室町幕府・御家人と官途」では、官途が天皇による叙任という大原則を離れて室町將軍の恣意によって行なわれるに至り、それが室町殿袖判口宣案・法体任官・武家員外官の補任・職務内容不存在の官職名等の出現となり、これに対応して任官者が室町將軍に礼物を献上することが一般化し、官途贈与と「御礼」献上が新たな秩序形成の役割を担ったと論ずる。

第二部「中世後期における「礼の秩序」の形成と機能」は、官途の返礼としての礼物に始まるような、贈与交換を媒介とする秩序の設定が「礼」と呼ばれて室町時代に盛行したことを論じ、これを「礼の秩序」と呼んで、時代的特質であるとする。

第四章「室町時代における贈与に関する一考察——進物折紙と室町幕府財政——」では、進物折紙という特定の様式と機能を備えた文書を素材として、贈与者から受贈者への金品の目録であるこの文書が、将来の現物贈与を予定した約束手形的機能を獲得し、將軍への折紙進上が幕府財政の一環に組み入れられてゆくことを明らかにする。

第五章「室町殿南都下向における負担——贈与の構造と「御礼」——」では、義満から始まる將軍の南都下向が將軍の一代一度の晴れの行事となり、これを迎える興福寺等南都側は所領に段銭を賦課して費用を調達するが、將軍は贈与を受けた財貨をそのまま贈与者に寄進することによって自己の権威を明示したことを論じ、將軍は「御礼」と称する贈与交換行為の頂点に立つことによって、自己を政治秩序の頂点に位置付けたとし、贈与者は「御礼」を役として領内に転嫁するが、これは国人領主と將軍の間にも同様であると論ずる。

第六章「室町殿権力と「御成」「御礼」」では、義教の事例を主として將軍の公家邸・武家邸への「御成」と寺社への参詣、この種の行事の終了後に行なわれる当事者及び諸人の將軍邸への参集——



礼物献上を伴う祝賀の表意——を扱い、永享の乱の鎮定という政治的大事件を素材として、「御成」と「御礼」が国家秩序維持の可視的表現として機能したことを論じ、また四代将軍義持の応永頃から、年頭行事以下の祝賀行事が贈与交換を伴う行事として定式化するとする。

第七章では、こうした「礼」が、支配階層間に止まるものではないことを、「中世後期の守護権力と「礼」——東寺領丹波国大山荘・播磨国矢野荘を中心に——」として論ずる。守護山名氏はこれらの東寺領荘園に守護役を賦課するが、荘園領主・農民側は共同して守護の荘園侵略を防止するために礼物を贈り、政治折衝を行なう。この礼物も応永頃から正月・歳末の定式化した「礼」として秩序化され、その財源は荘園領主と農民の交渉によって決したとする。

かくして論者は、鎌倉御家人に対する官途授与が、幕府の統制下に置かれることによって武家の政治秩序維持の機能を果たしたことを明らかにし、十四世紀に至って室町幕府のもとで官途の意義が変化し、これに伴っていた答礼の財貨献上が、将軍への進物という「礼」として新たな機能を獲得し、将軍を頂点とする政治秩序の表現となったことを論じ、且つ、これが支配階層のみならず在地の秩序にまで浸透したことを明らかにした。

論者は鎌倉・室町時代の膨大な古文書を蒐集し丹念に分析するとともに、的確に古記録類を渉猟しており、その史料解釈は信を置くに足り、その研究成果は従来の研究を進展せしめるものであって、斯界の学問的発展に寄与するところ大なるものがある。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。